



論説委員
田原 直樹

掘り出された「化石」の数々。でもよく見れば、携帯電話やキュービー人形、地球儀じゃないか。現代文明が突如滅び、2千年後に発掘された。そんなコンセプトで作られた現代アートである。作者は就美短大教授、柴川敏之さん(52)だ。

地球上では異常気象による災害が増えているし、人類を滅亡させただけの核兵器もある。豊かな文明を享受する私たちも、いつ滅びるかわからないのだ。人類の末路を暗示し、警鐘を鳴らす柴川作品を、何度が取材してきた。

その柴川さんが熊本県津奈木町のつなぎ美術館で25日まで展覧会を開いている。「夫婦×アート×ESD」の試みと聞いた。

ESD(持続可能な開発のための教育)は環境破壊や紛争など地球規模の問題解決への取り組みを学ぶことらしい。国連教育科学文化機関(ユネスコ)が提唱する。

柴川作品はESDに通じるだろうが、「夫婦」がどう関係するのか。「ほくのおくさん」と題された奇妙な展覧会をのぞいた。

作品「そこに置かれて」は、脱いだ靴下の化石と会話の吹き出しで構成。「靴下拾って歩くために生まれたんじゃない!」「今やろうと思っただけに!」。片付ける妻の小言と夫の言ひ訳のよび。

作品「80%の誤解」は、山積になった洗い物の化石だ。「8割方

千里の道もまず家庭から

持続可能な社会へ

やっとないたよ」と自慢げな夫に、「それ、2割だから!」とキレる妻のやりとりが添えてある。

共働きで幼子1人の柴川家で、夫婦がすれ違う日常の「こま」を作品にした。やはりタメ夫の筆者には身につまされる展示の数々だ。

今回の展覧会は、妻の発案という。妻弘子さんは岡山大学の助教でESD研究者。夫のアートを理解しつつも育児や家事に非協力的な姿勢に憤まんを抱える。「2千年後もいいけど、足元が炎上しているわよ!」。ある日、言い放った皮肉が「夫婦×アート×ESD」の発想を生んだ。

だが地球規模の問題解決を図るESDと、家庭の問題が一体どう関係するのだろうか。

弘子さんは、日本語訳がESDを分かりにくくしていると嘆く。確かに「持続可能な開発のための教育」では、何にどう取り組めばいいのか捉えどころがない。

「何を持続可能にするか。開発とされるが、根っこは一人一人の命、生活と考えることがESDの理念に近い」と弘子さん。かみ砕けば、ESDとは「命をつなぐための問い掛け」らしい。

まず家庭に、問い直すべきことが多くあるそうだ。

なぜ夫婦なのに協働できないのか。「社会的問題が家庭に落とし込まれているから」。父親が働いて母親は家事を担う家族モデルな

ど、社会で当然視されてきた慣習や仕組みが根っこにあるとみる。その根は深く、共働きが珍しくない現代も変わらない。むしろ幼子を抱えて働く母親に世間の目は冷たい。弘子さんの実感である。そんな社会の慣習や空気を考え直すことが「命をつなぐための問い掛け」であり、ESDの第一歩らしい。夫婦や家庭が変われば、社会や環境、ひいては国際関係の改善につながるのとみる。

環境問題と家庭の関わりを映す作品もある。「プラスチックな食卓」は、忙しさからプラスチックの食品などに頼る生活を告発する。

作品に込められた鋭い指摘に、たじたとになりながらも考えた。環境問題や紛争の解決に、無力な自分は何もできない。でも足元から一つ一つ変えるというESDならできそう。第一、家庭が平和になるのなら、やらぬ手はない。

さて赤裸々な展覧会を通して、夫婦の協働は進んだのか。柴川さんは「もっと褒めてよ」と恨めしげ。「やろうという気持ちを抱めて育ててほしい」。そんな夫の言葉に妻はまた、いらつく。「人が変わることの難しさを痛感した」

意識の高い家庭でうだからゴールは遠い。だが千里の道も一歩から。いつの日か、家庭不和も環境破壊も「化石」にしたい。



夫婦げんかを物語る靴下の「化石」

